2022 Optimist Asian&Oceanian Championship

開催地：インド・ムンバイ

期間：12/13~12/20 (12/10 出発・12/21 帰国)

参加艇数：101 艇

監督：鈴木 あづさ 国代表：加原 奈緒子 コーチ：中澤 剛士

参加選手：有本 心優 (中 3) 蔭山 陵 (中 3) 嘉手川 湮帆 (中 3)

北川 淳朗 (中 3) 鈴木 しおん(中 3) 兒島 惟高 (中 2)

中澤 太郎 (中 2) 岩波 将吾 (中 1) 加原 弦季 (中 1)

成績：1 位タイ 2 位シンガポール 3 位シンガポール 4 位シンガポール 5 位タイ

11 位 鈴木しおん (アジア女子 3 位) 16 位 加原弦季 18 位 岩波将吾

25 位 中澤太郎 28 位 兒島惟高 31 位 有本心優 32 位 嘉手川湮帆

41 位 北川淳朗 66 位 蔭山 陵

チームレース成績：1 位シンガポール 2 位タイ 3 位日本 (有本・岩波・加原・中澤)

長い長い準備期間・あつという間の大会期間

2022 年 2 月、蒲郡での NT 選考会で 10 名のアジア・オセアニア選手権のメンバーが決まった。開催地は 韓国・麗水(ヨス) 日程は未定。

しばらくして日程は 4 月末に決まるも、コロナの大流行により 8 月に延期される。

さらには韓国が開催を辞退し、開催国を探すところからに、、、

大会に向けて準備をするも、開催されるかどうかもわからない状況下でのモチベーションの維持が難しく、またメンバー 10 名中 6 名が中 3 で進路にも関係する時期と重なっており、本当に長くしんどい期間であった。インドのムンバイで 12 月に開催されることが決まり、やっと、とほっとした思いであった。

開催が決まってからはさらに入念な準備と、様々なレースでそれぞれが経験値を上げ 12 月 10 日にインド・ムンバイに向けて日本を出発した。

インドという国

人口 14 億、エネルギーに溢れている印象を受けた。予想はしていたが、12 月の日本から真夏の 30 度越えのムンバイは、皆体が慣れるまでに数日かかった。

そのことを見越して前入りしていたため、レースが始まる頃には慣れることができた。

また飲み水には要注意と聞いており、日本から水を持ち込む選手がほとんどであったが、幸運なことにホテルの衛生管理がしっかりしており、提供されるミネラルウォーターや食事に問題がなく、体調を崩す選手が 1 名も出なかった。このことはレース出場に大変プラスに働いた。

ホテルでのセキュリティは非常に厳しく、日本から持参した炊飯器が部屋で使えずホテル側に保管されるというハプニングも、、、サポーターの尽力により日本大使館の協力を得て、レースが始まる前日にホテルの調理場で早朝ご飯を炊かせてもらえる許可をもらい、選手たちは毎日美味しいおにぎりパワーで頑張ることができた。

ただ日本と比べルーズな面もあり、予定なく急なスケジュール変更は当たり前であり、毎日昼から（13：30）レースなど、日本とは違う環境に早く慣れ、まわりに振り回されないことが大事だと感じた。

前半戦 勢いにのる日本勢

予選シリーズ初日から、中澤選手の連続トップを皮切りにシングルを連発する日本勢。101艇を2グループに分けたフリートの中で、思った以上に海外選手に負けずに帆走できると感じた選手が多かったようだ。本番が始まる前に2日間練習をしっかりと行い、複数国でのレース練習にも参加することで、心と体がしっかり準備できたこと、

（風速は4-12knot 波は立ちにくい）気後れすることなく積極的なスタートを行い、はっきりと見えているブローを取りに行くコース取りができていた結果だと思う。

手に汗握るチームレース

レースの中日はチームレースが開催された。日本からは JAPAN 1（有本・岩波・加原・中澤） JAPAN 2（嘉手川・北川・兒島・鈴木）の2チームが出場した。途中 JAPAN 同士の対戦もあり白熱した勝負の末に JAPAN 1 が準決勝にコマを進めた。準決勝ではタイに3マークでのマークトラップに抑えられ惜敗した。かなり悔しい気持ちを胸に、地元インドとの3位決定戦ではフィニッシュラインまでもつれる大接戦となったが、見事逃げ切り3位入賞 銅メダルを獲得した。JAPAN 1 の4艇が並んでハーバーバックする姿には本当に感動をもらった。

課題 後半戦の戦い方

タイ・シンガポールとの差が明らかに出た後半戦となった。どのようなコンディションでも1上をシングルで回航するプランニングと実行力がタイとシンガポールにはあった。シンガポールは自国コーチに加え、スポーツ心理学のコーチが帯同しており勝つために国をあげて取り組む姿勢・体制が見えた。またタイは自国コーチの体制もしっかり整え、さらに開催国インドにコーチを送り、そこで得る情報をタイにフィードバックしてレースに臨んでいた。

ゴールドフリートの11位～40位はレベル差がほとんどなく3マークまではほぼ横一線でやってくる。その集団の中から3マークの手前でラップを切るスピードに差があり、日本勢はそこに苦しめられた。その中で鈴木選手が底力を見せ、後半追い上げた（アジア女子3位）。課題は残るが、最終レースのフィニッシュラインを切るまであきらめずに戦い抜いた選手たちは本当に立派だった。

選手たちの今後に期待

12月のこの大会をもって中3メンバーはOP卒業となる。

心優・湊帆・しおん・陵・淳朗・僚介 長い間親子で本当によく頑張ってきたと思う。最後インドのムンバイでラストセーリングできたことは一生の思い出として心に残るだろう。OP級を卒業しても次のステージが待っている。これからも楽しくセーリングを続けて行ってほしい。中2以下のメンバー 惟高・太郎・将吾・弦季はもう2ヶ月後に迫った2023年のNT選考会で必ず良いパフォーマンスを発揮すると信じている。

次回の2023アジア・オセアニア選手権大会はアラブ首長国連邦(UAE) アブダビで開催される。どんなドラマが待っているのか、今からとても楽しみだ。 (中澤)